

那羅山

〔和漢三才圖會七十三〕添上郡

手タケ向山 在若草山之邊略○中 素性法師於是詠歌據此歌稱手向山

〔日本書紀五〕十年復遣大彥與和珥臣遠祖彥國蕘向山背舉壇安彥爰以忌瓮鎮坐於和珥武鏝坂

上則率精兵進登那羅山而軍之時官軍屯聚而躡躡草木因以號其山曰那羅山躡此云布

〔古事記下〕即自山代廻到坐那良山口歌曰都藝泥布夜麻斯呂賀波袁美夜能煩理和賀能煩禮

婆阿袁邇余志那良袁須疑袁陀氏夜麻登袁須疑和賀美賀本斯久邇波迦豆良紀多迦義夜和藝幣

能阿多理

〔古事記傳三十六〕那良山口那良は上に出傳二十五の山口は夜麻能久知と能を添訓べし月次

祭祝詞に山能口坐皇神等乃云々とあればなりさて此山は山城國相樂郡より大和國添上郡

奈良を越る道にていはゆる奈良坂なり略○中さて書紀には時に皇后不泊于大津更引之泝江

自山背廻而向倭云々即越那羅山望葛城歌曰とありて御歌は此記と全同じかくてこれに越

那羅山云々とあるに依れば此記に山口とあるは那良の方より上る山口なり

〔萬葉集一〕過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌

玉手次タメ畝火之山乃檀原乃日知之御世或云阿禮座師神之書櫻木乃彌繼嗣爾天下所知食之乎

或云天爾滿倭乎置而青丹吉或云平山乎越或云虛見倭乎置青丹

〔運步色葉集阿〕天香久山 又具

〔運步色葉集伊〕岩戶山天香久

〔書言字考節用集二〕餘香久山俗呼謂神樂山或云天籠山

〔和漢三才圖會七十三〕十市郡

天香久山 在興禪寺西

天香久山